学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
東京都豊島区目白
1丁目5番1号
電話(986)0221内線260
発行・編集責任者
新屋敷正隆
送料とも年間 200円

今号四ページ

二面 記者座談会 意見広告
三面 韓国シリーズ(2) 中年御三家公演
四面 大学祭を考える

第5回大学祭 平穏に幕閉じる

いまだ過渡期の様相

第五回大学祭は前夜祭のちょうちん行列、神輿(みこし)行列を皮切りに、十一月二日から五日に渡って行なわれた。今年は見物人の出足が好調で、有名人の講演会も多く、フェスティバル的要素には事欠かなかった。表面的には"何もなかった"大学祭であったが、『今大学祭運動の中心的な役割を演じていた大学祭実行委員会(以下・大実委)の内部における不調和状況。"お祭り"にうかれた参加者達』を見るかぎり、果たして「研究発表の場」「学生自治集約の場」としての大学祭であったといえるだろうか。今大学祭の意義を据え返してみたい。

今年も恒例のみこし行列で始まったが…

今大学祭は「過渡期の苦闘を我がものとし、創造と自治の無限の海原へ」のスローガンのもとで行なわれた。

大学祭を克ち取って六年目。加藤大実委委員長は「去年の大学祭が"定着期"であるならば、今年は"学生自治"の集約の場"としの大学祭への新たな出発点である」と今大学祭を位置づけた。具体的には参加団体総会(以下、参団総)を論議の場とし、その論議を通じて大学祭を創り出して行こうとする姿勢をうち出した。

当日、旧図書館から北一へ続く道には模擬店が乱立し、文芸春秋「金脈問題」の記事のコピーを販売する者までが現われた。ピラ校と西一の間には"祝学習院院祭"をかかげた運動部による居酒屋が設けられ、「リカちゃんショー」を開くなど、お祭り的雰囲気が蔓延。院祭当時と何ら変わらない様相を呈した。が、研究発表の展示には足をとめる者は少なかった。

講演会では「中年御三家勢ぞろい」「かまやつひろしコンサート」など知名度の高い者の出席する企画は大盛況のうちに終わった。その反面「刑法改悪…」「インフレを…」「韓国文化弾圧と…」などの政治・経済的シンポジウムへの参加者はわずかであった。

精力的に取り組んだとみられる展示としては生物部・音楽愛好会・広告研究会…があげられるが、日常の活動とかけ離れた企画をたてるサークルが多かった。

また、革マル系学生が大実委の構成員に加わっているため、他党派との混乱を恐れてか正門前には機動隊の姿が見られた。

二義的な発表の場…か
院祭訣別の意義、再確認を!

学習院大学祭も今年で六回目をむかえ、学生の間には大学祭はあらかじめ組まれた年間行事のひとつであるという意識がみえ始めている。六年前われわれの先輩が院祭を廃止し、大学祭を当局から克ち取ったのだという事実もその過程も全く知らない学生がふえている。「現在の大学祭はどこも似たり寄ったりのお祭り騒ぎだ」という学生の声。このことからわれわれの大学祭がここ二、三年創意・自発性の目立たぬ「日常の文化=サークル活動・自治活動の総集約の場」(大実委アピール)からも縁遠いものとなっていることが言えよう。

原因としてひとつには参加団体側の姿勢が大きな比重を占め、もうひとつには大実委側の姿勢が問われよう。

第一の参加団体側の姿勢であるが、現在参加団体のほとんどがサークルで占められている。が、そのサークルに『大学祭は自らの手で創りあげてゆくものだ』という視点が欠如している。これは相も変わらぬ模擬店(それもサークルと直接関係のない内容)の乱立、中央企画、特にシンポジウムにほとんど参加のない事などに端的に表われている。

では、何故サークルに大学祭への創造的な取り組みがみられないのか。現代の非人間的な受験戦争を経てきたわれわれ学生にとって大学はどのような意味を持つのか。ひたすら一流大学(?)にはいらんとする世間一般の風潮の中で、大学へはいってしまった学生は宙ぶらりんの状態にある。「受験勉強からは一応解放された。が前途にはまた競争の激しい社会が控えている。それまでの一時期、楽しく過ごそうではないか」といった考えが蔓延(まんえん)し、俗に一番遊んでいるのは大学生だと言われる。このため大学のサークルは、多く"息ぬきの場"として存在し、それ故その"息ぬきの場"で物事をまじめに考えよう、創りだそうなどという気持ちは、当然おきないのである。学習院大学のサークルもサロン化が進行し、社会科学系のサークルは、停滞している。

また、意欲的な活動をしようとしているサークルも、大学祭の捉え方が曖昧(あいまい)である。音楽・美術といった芸術系サークルでは、大学祭期間以外での発表会に関心が向けられている。サークル内でのゼミが活動のほとんどという所もある。大学祭は第二義的な発表の場であり、予算が減っては困るから参加しようという訳だ。

かつての「院祭」は、輔仁会の「連合大会」として幼・初・中・高等科・女子部、そして短大・大学と一貫性教育における親睦の場として行なわれていた。幼稚園児から大学生までという次元を異にした集合体が一同に会するというアンバランスを包含して、展示内容、展示室等に制約が加えられ学生の自治は全く無視されていた。このように一貫性教育の基盤として学生の自治を拘束する輔仁会体制を打破し、「学生の自治の祭典」「真の文化創造の場」としての大学祭を獲得するため、われわれの先輩は行動を起こしたのだった。院祭規約撤廃後、数々の妨害に会いながらも大学祭運動をおしすすめ、現在では「当局から完全に運営権、器具の管理権を得、大学祭を開催する事自体はゆるぎのないものとなった」(大実委委員長)

以上の点を踏まえ、今回の大学祭は行なわれたはずである。事実大実委は参団総を単なる事務連絡の場から論議の場へ持ってゆくように努力し、また去年の徹底的総括を夏期合宿などで行なったという。その結果大実委の方針に沿った企画を打ち出したところもあった。例えば"不当な労組解体を契機に新たな音楽運動を創り出している日本フィル問題"を取り上げた音楽愛好会等。しかし全体を通じてみるならばどうであろう。ゼミやクラス参加はほとんどなく、サークル祭という言葉がピッタリと当てはまる。

ここで第二の点としての大実委側の姿勢が問われる。「今年は大実委の発足が例年より遅かった」というような見方、あるいは大実委の役割を果すものが常設されていないという問題がある。これは大学祭を年間を通じた運動の一点としてみる態度が不足しているためではないだろうか。自治会が全学生の声の代表機関として一般学生に受けとめられていない現状では、クラス・ゼミの参加は一朝一夕で出来るものでない。現在のままでは、たとえクラス・ゼミの参加が増えても、他大学に見られるような模擬店で終わってしまうだろう。大実委は今回の総括を行なう最終参団総が終了した時点から次の大学祭に備え始めなければならない。

全学生もそれぞれの立場で大学祭というものを考える必要がある。そして真に"過渡期の苦闘をわがもの"とすることによって、初めて今回の大学祭が飛躍への第一歩として位置づけられる。

六月から十月までの経過

【六月十三日】自治会、各常任委員会代表による準備会。自治会・文常は大実委の構成について提案を出した。内容は例年一名の自治会代表を二名に増やし、運常の例年二名を一名に減らすというもの。しかし「大学祭は文化系サークルだけでやるものではなく、全学レベルでやるはず」との運、同常の反論に、自治会、文常は、運常の二名を認めた。が、自治会二名増員を強硬におし、その案は参団総にかけられることになった。

【六月二十四日】第二回準備会。大実委委員長は文常から出すことが確認された。

【六月二十六日】第一回参団総。準備会代表の加藤君から出された方針案についての討議のあと自治会二名増員を提案。この案に運営、同常系サークルは反発、文系サークルは賛成の態度を示し、双方の歩み寄りがなかった。

【六月二十八日】準備会案に関する緊急参団総。裁決の結果、圧倒的多数で同案は否決された。

【七月五日】第二回参団総。大実委が結成され、拍手によって承認された。委員長に文常・加藤君。副委員長に同常・宮本君。新設ポストの書記局長には自治会・佐藤君がそれぞれ就任した。

【夏休み】大実委は部屋割り・プログラム作成など本格的に動き出した。八月二十三日~八月二十五日には従来、大学祭内部であったものを各サークルレベルに拡大した大学祭合宿が行なわれた。

【九月十九日】第三回参団総。加藤委員長は春から夏にかけての大学祭運動の経過と意義の中間的総括を行なった。同時に、中央企画が紹介された。

【十月二十八日】第五回参団総。この活動の意義・大学祭に臨んでの大実委のアピールとして、基調提案が出された。が、その内容について、運常から「大実委として出しているが、内容は全然知らされていず、大実委内部での同意ははなかった」と反論が出た。それに対し委員長は「警備・中央企画など参加のよびかけをつくっていくという点で確認はできていたし、その他の内容については、一切まかされていた」と反論。大実委内部には「基調提案を出す前に内容について話し合ったら当然反対した」という声もあり、内部の話合の不徹底をうかがわせ、論議は平行線をたどった。

自治会・文常 独善的関与に問題
党派運動の弊害もちこむ ―解説―

今大学祭運営は「大実委構成に関して自治会二名増員案が否決された」「基調提案の内容について同好会常任委員会(以下・同常)運動部常任委員会(以下・運常)系実行委員が批判した」などで、大実委内部の不一致がみられた。なぜ自治会二名案は否決されたのだろうか。

各サークルは常任委員会を通してある程度大学祭に対する意見を反映できる。"全学祭"として大学祭を考えたとき、サークル以外の一般学生の意志はどのように反映するか。その窓口として自治会が存在するなら、二名出ても何もおかしいことはない。

しかし、問題は現自治会がそれをできるかということだ。現に自治会・文化部常任委員会(以下・文常)系実行委員は、大学祭準備期間中、学校へ来ないことが多かった。

特に委員長・書記局長の不在は「参団総の日程のメドが立たない」「事務連絡が不徹底で、財務・管理など各部がバラバラ」と、直接事務面の不備につながった。

さらに「現状況を判断して…」と公式の理由もないまま、実行委員長は大実委内の承認なしに塚原総務委員長にその全権を委任。

「これはサークル無視以外何ものでもない」との批判の中で、彼らは「対中核との闘争で忙しい」と言う。自己党派の運動の弊害を大実委内に持ち込んだと考えざるを得なくなる。

大学祭合宿は、論議をサークルまで拡大するという目的では評価できる。しかし日どりを直前に決定したり、連絡の不徹底などで参加サークルが少なく、盛り上がらなかったのもこのためである。

大学祭の意義について、合宿あるいは参団総で充分論議をつみ重ね、その中から中央企画や大学祭の方向をみつけていくという考えは、もちろん今年の大きな進歩にはちがいない。しかし大学祭は、予算査定・部屋割り・各種事務連絡ができずには成り立たない。今大学祭でそれを実質的に推進していったのは各サークルの代表(同常・運常系実行委員)である。

委員長としての責任をまっとうできるかということは、事前に考慮できたはずである。それを「自分たちがやらなければ…もう同常にはまかせておけない」と言い切り、実行委員長は就任前「委員長になったら絶対出てくる」とその意欲を示したのである。

問われる指導性

"大学祭を自分たちの手で成功させよう"と訴えた自治会・文常の目的は「大学祭を成功させた」という実績を一般学生に認識させることにある。現在低迷を続ける自治会の足場を学内に確立させるという意図が、そこには含まれている。しかしそのための「委員長就任」であり、自治会・文常ペースで大学祭を推し進めるための発言権の強化をねらった「自治会二名増員案」であるのなら、そこにはサークル・一般学生との接点はない。「学生自治の集約」そして「サークルの日常活動の成果発表」としての大学祭を指導していくという姿勢はうかがえない。また「自治会・文常は自分たちの党派闘争の拠点として、大学祭を利用しているだけ」とのサークルからの批判もきかれる。

「去年の司会問題などでの大学祭運動における実績をみてほしい」と自治会代表は言う。だが「事務の円滑な処理などの実質的な仕事をせずして、実績はありえないんだ」という批判がサークル内には多い。

基調提案の中で『大学祭をこわす者=中核派から守れ』という文があったが、「中核だろうが革マルだろうが、我々の造った大学祭を破壊するものから守るんだ」と断言するサークルの声を聞き、自治会・文常はそのワンマン的なかかわり方を考え直す必要にせまられているといえよう。

× × ×

院祭から移行して六年目。輔仁会体制の"象徴"としての院祭を否定し、大学祭を克ち取ったのは何のためだったのか。それは"学生の自治を克ち取る"運動であった。今年の大学祭も「全学祭=学生自治集約の場」をめざし、中央企画などサークルからの積極的参加をよびかけた。

しかし党派闘争で、自治会が、本来の意味での自治会の役割を果たせないという現実。このことは全学祭をよびかけながら、なお"サークル祭"から抜けきれない一つの大きな原因となっている。

われわれはこの機会に「真の自治会とは何か」「自治会はどうあるべきなのか」を考え、またわれわれも一個の自治会員として「どのように自治会をつくりあげていくのか」をも考えてみる必要があるのではないだろうか。

理由なき昇格不信任に歯止め
処分の軽減化もはかる
同好会規約を改正

十一月十五、二十一日の同好会総会において、同好会規約の改正が行われた。

十五日の第十三回同好会総会では、常任委員会より「昇格審査時の不信任投票には、その理由を銘記する」という主旨の条文を、つけ加えることが提案された。理由として「ここ数年、クラブの昇格が困難になっている。そこで安易な態度の投票を取り除きたい。また、昇格できなかったサークルは理由を知ることにより、今後の活動を発展させていくことができる」などが挙げられた。

これについて「不信任だけ理由を書くのは不公平だ」「昇格審査を時間をかけて充分やれば問題ない」との意見も出たが、全体として賛成の雰囲気が強く、採決の結果、賛成十八票、反対〇票、保留八票で可決された。

この結果、各サークルは不用意に不信任の態度を現わせなくなり実質的に昇格がたやすくなると予想される。

またこの総会では、処分問題に関する条文でも、常任委員会より規約改正の提案がなされた。内容は「現状では一度処分を受けると、十一月末という時機のため、翌年度予算査定が受けられず予算がゼロになる。これでは、役員改選をしたばかりで意欲のあるサークルにとって、活動の妨げになるばかりだ。今回の規約改正でこれを解消したい」というもの。

この提案に対して「注意処分では少し生ぬるい」「注意処分の具体例がなく、これではわからない」と反対意見。「同常はサークルの監視機関ではなく、活動発展を促す機関である。この意味で賛成できる」と賛成意見等が出された。採決の結果、賛成十票、反対二票、保留十三票と保留が多く継続審議となった。

二十一日の第十四回同好会総会では、この処分問題の再審議が行われたが、意見の出ないまま採決され、賛成二十四票、反対二票、保留六票、棄権三票で可決された。

以下は改正された条文である。

第十五条【総会の議決】

三、第十三条三項に関しては、白紙委任を除く出席同好会総会数の三分の二以上を要する。ただし反対もしくは不信任投票の場合、反対もしくは不信任理由を銘記しなければならない。

四、第十三条三項により、反対もしくは不信任理由が銘記されない場合、議長はこれを無効とすることが出来る。

第三十四条【注意処分】

一、第六条二項又は第七条のいずれか一つ以上に違反した場合、注意処分とする。

二、その他、常任委員会が必要と認めた場合、注意することができる。

声明
「政治主体」としての主張を排し 人間の立場からの"否定"を

学習院大学新聞の前身、学習院新聞は、昭和二十四年から四十七年に至るまで二十三年間に渡り、院内の報道に携ってまいりました。その後、真の"報道の自由"を確立すべく、学校当局の御用新聞から脱却し対象も大学生にしぼり、今日に来ております。

こうした"学生の自治"="報道の自由"を確立する直接の要因となった学生運動も、現在は停滞しています。その中で、ある新聞社は、セクトの機関紙もしくは、そのイデオロギーによる政治の道具的存在と化し、ある新聞社は、学校当局による不当な弾圧により、崩壊していっております。

我々、学習院大学新聞社を運営する者としましても、これらのことを考えずに通り過ごすことは、もとよりできません。「我社としての編集方針とはいったい何なのか」を理想の新聞を考える中で、見出し、よりその形態に近い形で、現実化していきたいと思います。

× × ×

我社は、社会における"否定的側面"を偏見なり、観念論によって、誤まった否定をすることなく、正しい事実追求の姿勢を目に見えぬ矛盾の探求を「科学」(必然性の追求)を通し行なわねばなりません。

この場合、「科学」とは、現実との対応の中で、何が権力であり、何が矛盾であり何が暴力であるのかを認識する手段です。

我社が、事実を認識し、判断し、真実を追求する上で、この「科学」を基柱として考えております。

◇政治活動と新聞◇

それではわが社は、新聞活動を通じ、何のために闘っているのでしょうか。

わが社の主たる活動は、「権力や矛盾や暴力によって、抑圧され、搾取され、また疎外されている"自分達"のために闘うこと」であります。

わが社の主たる任務は、「権力、矛盾、暴力に"否定"を加えること」であり、その手段は「ペン」であります。

わが社は、社会に生存するわれわれ人民が、いかに権力から疎外され、矛盾を強いられ、それを暴力をもって口封じさせられているかを、現実の対象の中からつかみ、編集していくとともに、主張していくものであります。

我社は、学生によって運営され、学生によって創りあげられています。したがって我々が、学生の立場を持ち、学生が抑圧されている面にペンをふるうのは当然でありましょう。が、しかし、我々が学生の立場のみに固執することは、誰かを差別しはしないか、との疑惑が常に生じてきます。大学に入学できない経済状態の人々、知能によって"差別"され入学できなかった人々これらの人々に対し、差別してはいないだろうかと。それ故に、我々は学生である以前に、一人の人間であるという立場を優先させます。人間として許せない事実、人間が人間として暮らせない世の中や機構に対し、我々はペンをふるいます。このことが「人間からの疎外」をなくす事に結びつくのではないでしょうか。

我社は、いかなる党派にも属しません。なぜなら、人民に対し、前衛よろしく"指導"していく事は、我社をして、一つの権力におとしめることになるからです。我社が真に人民と合致していくためには、狭義の意味での「政治主体」となることを極力排斥せねばなりません。

これは、「政治主体」の行なう運動にとって、都合の良い事実を載せ、マイナスの事実を載せない、ということが「政治主体」の一選と化した新聞(?)に良くあることから容易も当然のことと御理解いただけると思います。

また、現社会において、「これが人民だ!」と画一的に述べること自体に問題があります。

我社は、以上のように、「政治活動と新聞」との関係を認識するものであります。

◇当新聞社論◇

我社は、唯一の学内における新聞報道機関であり、全学生を読者としております。このことから、我々は、新聞社そのものの存在が、新聞の編集態度いかんによって問われてくるものと認識しています。他のサークル活動と異なる点は、新聞の任務が自分達の満足のためにだけ、活動するという基盤が存在しない点でありましょう。

しかしながら、我々学生新聞に携る者も記者より前に学生であり、その面からの限界が存在するのもまた事実であります。

講義のない時に、事件があってくれることは、ごくまれです。会議なり、総会なり集会なり、事件は、当然ですが、我々学生記者の都合で行なわれたり、起きるものではありません。

また、そればかりでなく、我々は、この新聞社運営にあたって、数多くの諸問題をかかえています。

中でも一番大きなものは、財政の面であります。昨年来の紙代の値上げ、印刷費の高騰に比較し、広告費が縮少の方向へ向かっていること、当局により財源をおさえられているために、自由な設備充実が計れないことなどです。

今後は、これらの弊害を乗り越えていこうと考えます。そして、新聞活動が「権力、矛盾、暴力によって抑圧され、疎外されている我々人民が、それを"否定"するもの」である以上、その側面が消える日まで真実を追求していく覚悟であります。

(編集主幹 新屋敷 正隆)

運常―委員長に大竹君
五名全員が一年生―同常
50年度常任委員決まる

十一月二十六日に開かれた運動部定例総会において、五十年度常任委員会役員が選出された。

本年度常任委員会より、大竹洋司君(経三=委員長)、依田真一君(法三)、前田義明君(政三)、岸文男君(政三)、田中昌子さん(国三)の五名が推選され、賛成八十六票、棄権一票の圧倒的多数で新役員が承認された。

この結果十二月一日より新役員の手で運動部常任委員会が運営されているが、新委員長の大竹君は来年度に関して次のように抱負を述べている。「甲南戦・四大戦等今年以上に頑張りたいと思っています。また運動部機関紙『白虎』の充実をはかり、運動部に対する理解をもっと深めてもらうように努力するつもりです」

大竹洋司君

今後もさらに運常では、現在の人数では運営にさしつかえがあるとして、常任委員の増員を予定している。

同常でも十一月二十九日、第十五回同好会総会において、五十年度常任委員が決定した。

田中誠君(政一)、久保彰一君(法一)、石田精一君(政一)、佐藤根(さとね)茂君(政一)、伊藤彰彦君(経一)の五名が立候補。「サークル活動発展に努力するつもりです」「同常の存在価値を再考してみたいと思います」等の演説を行った。これに関して、質疑応答なく採決され、全員が信任された。

なお、新常任委員会により十二月九日開かれた第一回同好会総会で、委員長に田中君がなることが報告された。

馬術部 全国大会で優勝す
剣道部・サッカー部も奮闘

運動部にとっては、大事な秋の祭典とも言える他大学とのリーグ戦。これを終えると冬に入るわけだが、今年温かくこのシーズンに入るサークルを紹介しよう。

〈馬術部〉

十一月十七日、馬事公苑において、全日本馬場馬術選手権が行なわれ、本学馬術部(殿谷一成部長)が、六年ぶり三度めの団体優勝をとげた。また、個人戦でも二位、五位、七位をしめ、圧倒的な強さを発揮した。

〈剣道部〉

十月二十七日、全日本学生剣道優勝大会に、関東大会で優秀な成績をおさめた本学剣道部が出場、ベスト十六に残る結果であった。

〈サッカー部〉

九月十五日から十一月十日まで開かれた東京都一部リーグ戦で、本学サッカー部は六勝一負一引分けで、九校中三位という成績を残した。

明窓浄机

先日、家の郵便受に「学習院百年記念事業資金募集趣意書」なるものが舞い込んだ。一口五万円二口以上という当局の厚顔無恥さかげんに、あきれながらゴミ箱へ投げようとすると、我が誠実なる母親殿曰く。「払わなくて大丈夫なの?成績にひびくんじゃないの?」▼なるほど世の親というものは、こういう発想をするものか。誰が誰だかわからない大学ならいざ知らず、名前と顔が完全に一致する中学高校以下ならわからぬでもない心配。ああ有り難きは親心。それに『学習院は…施設等の面が若干遅れ、今一段の充実が望まれ…ご子弟の為に…』(募集趣意書より抜粋)と書かれては、我が子のために投資する親も数多かろう。さては当局、この心理につけ込んだか。さぞや偉大な心理学者をかかえ込んだに相違ない。▼この事業の資金総額は五十二億円とか。そのほとんどが各方面の寄付でまかなうという。そのためか、保革逆転と騒がれた参院選のさ中、大学内でかような噂が飛びかった。「次の総選挙で、自民党が負けたら百年事業も御破算か!」──政治にはトンとうといと思っていた、我が学習院大生まで、自民党と財界、そして「学習院」のつながりを、ここまで認識していたとは頼もしい▼「趣意書」で院長は「学習院は人類と祖国に奉仕する人材の育成を目的」と述べておられる。現在その「祖国」が「自民党」に牛耳られ、その「自民党」が「財界」に操られているのなら、「学習院」はまさに自民党と財界のためにつくす人材育成に尽力していることになる。そういえば11/25付の読売新聞が、田中角栄氏が大蔵大臣当時、「学習院女子中・高・短大用地」として国有地を売却したと報じていた。そうでなくとも田中氏は目白に住んでいるのだしそのうちに、例の「金脈と人脈」に学習院の名が顔を出すかもしれぬ▼「趣意書」の一番最後に「百年記念事業委員」の諸氏が、その肩書と名前をつらねている。真に大学を愛し、大学の自治を愛す者なら、これら「財界人」のヒモがつく恐れのある、このような募金要求書は、即、ゴミ箱へ捨てることにしよう▼それにしても、すでに工事を始めている当局サン、もし資金が集まらなかったら、どうするつもりカネ?

渦まく話題のまっただ中!
世界のスター高倉健が巨匠シドニー・ポラックとやくざの世界に斬り込んだ!
*真紅の花に哀愁(ロマン)を秘めて
厳しい冬のような男がふたり
燃えて挑んだやくざの世界!
SYDNEY POLLACK'S THE YAKUZA
シドニー・ポラック作品
ザ・ヤクザ
テクニカラー パナビジョン
高倉健/ロバート・ミッチャム/ブライアン・キース/岸恵子
From Warner Bros. A Warner Communications Company
12月21日(土)より正月第一弾ロードショウ ★前売券800円発売中
渋谷 パンテオン (407)7219
新宿 ミラノ座 (202)1189
学生900円 一般1000円
●団体鑑賞のお申し込みは劇場または東急レクリエーション販促課(463)5891

学陽書房
名著入門ライブラリー
●一級の研究者がやさしく説いた名著のエッセンスと内容を平易に解説し、その今日的な意義を明らかにする。
〈新刊〉各価七八〇円
性思想の名著12選 安田一郎編
仏教の名著12選 笠原一男編
近代日本の名著12選 笠原一男編
〈既刊〉各価六八〇円
哲学の名著12選 古田光編
社会思想の名著12選 石堂清倫・菊地昌典編
革命思想の名著12選 荒川幾男
東京千代田富士見1 振替84240

吉本隆明 中村文昭 四六判函入1000円
吉本隆明の原像を原生的異和=よそ者意識に探った気鋭の詩人中村文昭の本書は、吉本思想傘下から激しく放出する位置から人間吉本隆明を描ききる。
衝動的性格 W・ライヒ/片岡啓治訳 900円
若きウイルヘルム・ライヒが衝動=本能的性格の概念に着目し、精神分析的性格理論を精密に展開して、後の「性格分析」を導いた先駆的労作。
永久男根16 平岡正明 950円
無言の現在 菅谷規矩雄 900円
イザラ書房 東京都文京区本郷4・8・7〒113 電話811-8753 振替東京148025

現代の眼 新年特集号 特価350円
全特集=戦後三〇年史=固執と転成
原民喜とヒロシマ…中島竜美
広津和郎と松川事件…松浦総三
谷川雁と大正闘争…神津陽
吉本隆明と「戦争責任論」…湯浅赳男
宮本顕治と自主独立路線…[illegible]
小田実とアメリカ体験…室謙二
本多勝一と「極限の民衆」…[illegible]
滝田修と全共闘運動…清水多吉
森恒夫と連合赤軍事件…丸山照雄
岡本公三と「アラブの大義」…竹中労
アメリカ三人衆初夢譚…神井林二郎
日本史のなかの昭和五〇年…謝世輝
【特別付録】恒例論壇地図「毎年新聞」
東京・京橋3-11 現代評論社 振替東京4419

国民忘れた軍事力増強

シリーズ韓国 第2回

前回では韓国の憲法、緊急臨時措置法と法令集を通して韓国の現実を考えてみたが、韓国の独裁体制と私達日本人とは何の関係もないものだろうか。日本と韓国には歴史的にも深い関係があり、また現在でも経済的に深い関係を持っている。政府間の対韓援助だけでなく、日本の民間企業も多く韓国に進出している。ここに日本で公害をおこした企業の韓国進出阻止の市民運動をしている「富山化学の公害輸出を阻止する実行委員会」というグループがある。私達は「富山化学の公害輸出」に日本企業の韓国進出の一面を感じ、この会を訪れてみた。また韓国を訪れたことのある、藤島泰輔・飯坂良明両氏に随想を書いていただいた。

「富山化学の公害輸出をやめさせる実行委員会」(以下実行委とする)とは、東大の公害自主講座から生まれたグループである。

彼らは、「日本で公害タレ流しを問題にされたプラントをなぜそのまま韓国に輸出しようとするのか」という一致した疑問の下に集まり、今年五月、富山化学工業がマーキュロクロム製造プラントを韓国に売り渡す事を阻止した。

この富山化学とは、赤チンの原料となるマーキュロクロムのわが国唯一のメーカーである。しかしその原料に水銀を使用することから、富山湾の水銀汚染問題などを引き起こし、昨年九月より操業を中止していた。このように、日本で生産不可能になったにも拘らずその製造装置に何ら公害防止の技術改良を加えることなく韓国へ売り渡し、製品だけを逆輸入しようとした。

実行委では、これを日本における公害企業の韓国輸出ではないかと考え、富山県の「公害を告発する市民連合」などと連絡をとり協力し合った。そしてこの運動は富山化学の公害輸出反対運動へと発展していったのである。

さらに、実行委は公害輸出企業の摘発を続けていき、現在は第二の富山化学と考えられる日本化学工業(本社・東京都江東区亀戸)の韓国進出阻止運動を行なっている。

日本化学は、無機薬品の代表的メーカーで、現在、韓国のウルサンに合弁会社(会社名、ウルサン無機化学)をつくり、来年には操業を開始しようとしている。

この日本化学は戦争中、日本帝国主義を支える軍需産業として、兵器など軍需物資の生産・加工にあたる軍の指定工場であった。そして現在でも、過マンガン酸カリ、クロム塩、燐製品、溶成燐肥などの製造を行なっている。この中でも黄リン・赤リンは爆薬の原料となるものであり、無水クロム酸は兵器のメッキのもと、重クロム酸ソーダは軍服の染料となるものである。

特に、同社の主要生産物である重クロム酸ソーダは、その製造過程で多量のクロム鉱さいを出す。問題なのはこのクロム鉱さいに劇薬である6価クロムが含まれている事だ。

実行委の調査によると、日本化学の工場でクロム鉱さいが出るのは、東京小松川工場と山口県の徳山工場である。そのうち、小松川工場は東京都の土地再開発計画のために、移転を勧告され、現在は操業をしていない。

また、徳山工場では不法海洋投棄が発覚し、山口県の工場新設奨励条例の対象からはずされ、工場敷地拡大の認可もおりていない状態である。

そこで、公害企業として日本では身動きできなくなったため、今度は韓国に進出の計画をたて合弁会社を設立しようとしている。そして、その製品を日本に逆輸入するつもりである。しかし、これでは全く富山化学の場合と同様に公害への防止対策を、少しも考えてはいない。単に企業利益のため、韓国の民衆に公害を押しつけようとしているだけである。

そこで、実行委は、両企業に代表される、日本の公害輸出産業のしくみを内部から崩壊させようとするものである。

「反共」を旗印に「援助」
内実は経済侵略

偽りの日韓協力＝

このように、なぜ日本の公害企業が韓国へ、安易に進出しようとするのか。それは韓国の国内状況によるものではないだろうか。

前回のシリーズで示した通り、現在の韓国は大統領緊急措置法などが無謀に発布されている。それにより、民主化の道をたどるどころか完全に民主主義は消滅させられてしまっている。つまり、全く朴大統領独裁下にあると言えるだろう。

このような中で、朴政権は北朝鮮からの侵略阻止と韓国の近代化という名目で、ひたすら外国主要諸国からの援助を受け入れている。

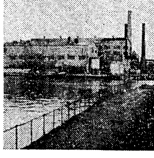
この朴政権の目的のひとつは、韓国の民衆に外貨を稼がせ韓国にうるおいをもたらせようとするものである。さらに、もうひとつの目的と考えられるのは、韓国の地を外国の経済的植民地におとしめる。そしてかわりに、その国から代償として軍事、経済援助を受けるというギブアンドテイク式の国際関係をつくろうとすることである。

というのも、国家非常事態宣言にみられるように、現在は戦時下であると宣言した朴政権は常に北からの脅威に対抗することを考えているからだ。しかし、この朴政権の下したように、ほんとうに北からの侵略はあるのだろうか。

国際アムネスティの人たちは、韓国に北からの脅威は絶対にないと断言している。このことから朴政権は、ただ「反共」という言葉を無意味に利用しているにすぎないように思われる。

×　×　×

韓国のマサンには、「自由貿易地区」というものがある。そこでは、企業に税金がかからず外国にとっては、自国の土地がそこにあるようなものになっている。そのため続々と外国の企業が、そこに進出している。



そのうえ、それらの企業にとって好都合なのは、そこで働く韓国人たちへの朴政権の弾圧である。

韓国の労働者は組合組織を作ることも許されず、従って賃上げ要求の権利さえも認められていないまして公害反対運動や危険作業反対運動は完全に禁止されている。

このようにして、朴政権は公害企業が韓国に入って来ても、また自国の民衆が低賃金で労働させられていても一切構わず、軍事援助・経済援助という見返りのために投資国に多くの利益を許している

アジアは日本の下請け＝

ところで、このような状況下にある韓国へ今、最も進出しているのが日本である。マサンにある工場も、そのほとんどが日本の企業で占められている。

そしてそのまたほとんどが輸送面で便利であるとか、土地が安いとか、低賃金であるという理由で進出してきたものである。

さらに前に述べた富山化学や日本化学のように、公害問題で日本から追放され、韓国に来ている企業も多いのではないだろうか。

このように、韓国民衆を無視した形で韓国への日本の経済進出が行われている。

日本化学工業の人は言う。「日本では工場建設の適地はない。大阪ー徳山、徳山ーウルサンの距離はほぼ同じ。そうなれば、ウルサンの安い用地を確保するのは当然。」

この言葉から、韓国を日本の経済国にあるひとつの地域であると考え、利益だけを追求する日本企業の姿がうかがわれる。

「韓国へ」と同様の意識で、日本は今、安価な労働力と工場用地また、広大な商品市場および資源供給源を求めて、アジアへ進出している。

このことはフィリピンや台湾にある「自由貿易地区」へ日本が大量に進出していることでわかる。そしてここで作られたものは、現在も絶えることなく、日本に逆輸入されている。

つまりアジアはあくまでも日本の企業にとって下請けにすぎないのである。

これは、日本の「経済援助」という美名の下に行なわれている「経済侵略」と言えるのではないだろうか。

実行委の人が我々取材班に言った最後の言葉は印象深い。

「アジアの人達の血の犠牲の上になりたっている日本の繁栄。そして私たちはその血の中にどっぷりつかっているのだ」。

6価クロムの害について

クロム鉱さい中に含まれる6価クロムは、体内にはいると腎臓炎・尿毒症の原因になり場合によっては死亡する。

小松川工場ではクロム鉱さいを七十年以前は埋立て・海洋投棄、七十年以後は6価クロムを3価クロムにかえ処理していた。しかし3価クロムも無害を証明するデータがなく、むしろ3価クロムの方が発ガン性の危険がある。

なお日本化学につぐ重クロム酸ソーダの生産会社、日本電工の栗山工場では、五十年から七十三年の間に十人が死亡し、四人が職業病に認定されている。

記者座談会

外にウォーターゲート、内に田中金脈問題。今年は、ジャーナリズム"主役"の事件が多かった。『なかなかやるな』『この程度か』感想はさまざま。わが新聞社内でも、活発な論議が起こった。学生と言えども、新聞に携わる人間たち。1人前に、新聞批判なども飛び出した。「理想の新聞とは何か」「現在の一般新聞は、欠点が多い」そして「大学新聞とはいかにあるべきか」口角アワを飛ばして5時間余。アチコチに話題が飛んで、いささかまとまりはないが、われわれがどのように大学新聞を考えているか。その一端でも知っていただければ幸いなり。読者諸氏にも、大学新聞の創造に寄与していただくことを願ってやみません。(論説委員会)

理想の新聞を求めて
本社の基本理念
知り得た全てのニュースを
「公正」を看板倒れにしないため

― これから新聞のありかたについて話し合っていくが、まず「意見広告」の問題からいこう。

A その問題は、昨年の十二月にサンケイ新聞に載った自民党の意見広告に対して、共産党がクレームを付けたことから、注目されるようになったね。

B 意見広告で有名なのに、ベ平連がニューヨーク・タイムズに載せたのがある。西欧諸国では、昔からわりと定着している。

A 日本では、まだ全面的に解禁されていない。せいぜい選挙中の五大政党のものや総理府のものぐらい。

C でも方向としては全面解禁に向っているといえる。

A 共産党とサンケイ新聞との争点には二つあり、一つは意見広告とはどういうものか、二つめは掲載する新聞の体質はどうあるべきか、ということ。新聞は国家や権力に対して、たてまえとして、言論の自由があるが、読者は新聞に対して言論の自由があるのか、という疑問がわく。そこにアクセス権という問題がでてくる。意見広告はアクセス権の手段になるのではないか、だから意見広告は解禁されるべきだ、という論議。

B そうなると金の有無とか、新聞社が意見の違う団体には解禁しないという問題が起ってくる。

A そうだね。今回のことでサンケイ新聞の意見広告を共産党は意見広告として認めず、自民党と一体になった反共攻撃としている。ここからサンケイ新聞のあり方はどうか、という論議がわく。サンケイ新聞は一般紙・全国紙と自らを標榜している。だがはたして。

C そう考えると、サンケイ新聞だけでなく、新聞一般がどうあるべきかという問題にまで、この意見広告の問題は広がってくるね。

― 意見広告問題から、新聞のあり方、理想の新聞とは、ということが問題になってくる。ではいったい現在ある一般紙や機関紙がどういう立場にあり、どう理想からかけ離れているのか、という点で議論していこう。

B 機関紙というのは、直接政治に携わっている党派の運動体が活動の一環として作るものではないか。これで危惧しなくてはならないのは、運動体にとってマイナスの要因を、紙面に表わすかどうか。自分に有利な点だけを報道していってしまうのではないか。

C 確かに機関紙は、自分のことを過大評価しがちだし、まあこれが機関紙の機関紙たるゆえんだろうね。

B だから機関紙は公正な報道ができない。こうなると新聞としては、ナンセンスなものになってしまうのでは。もちろんこれは、新聞が主体をもってはいけないといっているのではない。

― それでは、いわゆる一般紙はどうだろうか。機関紙との違いという面、理想の新聞という面から考えて。まず違いから。

A 機関紙と違って、一般紙は企業の営利性はあるものの、それ以外の目的をもっていない。もちろん資本主義云々となればそうも言えないが、現実に一定の党派性はないといえる。取材する場合においても、フリーハンドが維持されている。百%ではないとしても。

E 一般紙における"声"という欄に社説とは主張を異にする投書を載せているというのも、機関紙とちがい、まだ公正さを保っているのではないか。

A たとえば、ある県で全野党共闘ができずに、革新系の候補が負けた。一般紙では、はっきり「全野党共闘ができず負けた」と報道するが、赤旗なり社会新報なりは他党が悪かったからだとする。ここに違いがある。

B こう考えると、機関紙とは明らかに体質を異にしていて、まあ理想の新聞に、近いといえば近いかも知れないな。しかし、今の社会における重大時に至ったときすなわち、資本主義体制が崩壊するといったようなときには、一般紙は信じられない。たとえば、六〇年安保時において、権力者側に大手新聞社が呼ばれ、ある打ち合せを行なった。その後の紙面が、打ち合せ前の論調と全く一変した。やはり最終的には、一般紙は体制の側に立つものなんだ。

― 機関紙と一般紙との違いから、一般紙の特徴に話しが移ったが、そのまま進めよう。

D 確かに、一般紙において限界はある。秘密漏洩事件において毎日新聞は秘密を手にしながら紙面で報道せず、社会党にそれをまわしたり、田中首相の金権政治ぶりを『文芸春秋』で明らかにされるまで、全く報道しなかったり。身近な例では、三年前のポルノ事件や今年の内ゲバ事件においても、事実無根の警察発表だけを報道している。

A ここで意見広告の問題を再び持ち出すと、一般紙はすべて中立公正・不偏不党を標榜しているにもかかわらず、サンケイ新聞と日本経済新聞が自民党の意見広告をのせ、他はそれをのせなかったという事実はどうなのか。

D これは、表向きは同じことをいっていながら、各新聞によって、編集方針なり、考え方なりが違っているという現われではないかな。

B こうなったら不偏不党・中立公正なるカンバンを降したらどうだろうか。

E 外国の新聞は、自分の立場を割り合いはっきりさせている。先進国としては、日本の新聞は特異なものだ。

D カンバンを降すと、本来の一般紙いい変えれば企業としての姿が出てしまう。今はカンバンが、一般紙をしばっている。

― もう少し討論内容をしぼって、一般紙の位置付けを考えてみよう。

A 個人として社会を見る場合一定の限られたものになってしまう。そこで新聞が社会を読者に映しだしている。

E それはそうだけど、一般紙はすぐにブームに乗ってしまう。公害がめだって来るとそれだけ、新幹線の事故、飛行機の事故、交通事故しかり。本当にその時期にその事故が集中しているのかというと、全くそうではない。

A この流行に乗っちゃうということは、はなはだ公正を欠く。

D 公正という言葉がでたのでいうが、マスコミに関する記事は一般紙には全てのらないな。

A テレビや印刷に関することものらないね。これは公正とは言えない。日本熱学や三省堂が倒産したとかは、大々的に載せるが、毎日新聞があやしくなっても一言も載っていない。

C 機関紙が公正でないということは、話し合ったが、こうなると一般紙もという気がする。もちろん大変な違いはあるが。

― 機関紙や一般紙の位置付けを行なってきたが、ここで理想の新聞とは、について討議していこう。

A 昨年の洗剤パニック時における新聞報道として、洗剤が不足しているという事実と共に、買いしめはするなというのがあった。しかし人々は洗剤を買いしめに走った。これはどういうことか。

E パニックが起った原因は、洗剤の市場での実態を追求せず、ただ消費者にだけ、買い占めるなといったことにある。新聞でこのように報道したことは、買い占めろ、としか読者の目には映らないよ。

B そうだね。何故に物が不足し、どこが、何のために品物をかくしているかといった科学的な論証を世論に知らせるのが新聞の第一義ではないだろうかね。だから昨年の一般紙の報道は、明らかにミスリードだったと思うね。

― ここで新聞というものは、世論に対してどうあるべきかを考えてみよう。

B 世論よりも先を見ているのが新聞、言いかえれば世論の前衛としての新聞というのはどうだろう。今の世論がこうなっている、ということを科学的に判断して、その矛盾を解明していくのが新聞ではないかな。

D 世論を作り出していくのが新聞と考えるのはどうか。新聞が昨年品不足という報道をしなかったら、あのパニックは起らなかったのではないか。情報化社会といわれるように、新聞が大衆一人一人の中に入り込み、それが世論を作り出していくのだよ。

B 確かに新聞の力は大きいよ。現象だけを書くと混乱が起こる。砂糖がないという事実を報道するから大衆が買いしめに走る。

A そう考えると新聞は、事実の裏づけができないと報道できなくなってしまうよ。本来新聞は、わかった時点でそれをすべて報道していくべきだ。新聞社がこの記事は載せ、これは載せないと報道に判断を加えたらどうだろうか。

B 新聞がどの立場に立って判断するかということが問題なのではないだろうか。

D それはもちろんだが、新聞の公正という立場に立った場合、すべてを報道していくということが必要なのではないかね。

A 判断するというのは、世論を信頼していないのでは。

E それでは世論を信頼し、あの洗剤不足という事実を報道しろというのか。それではパニックはどうなるのか。

A やはり載せるべきだろうね。たとえ一つのパニックが起きてもそれを契機に、世論は、ひとつ成熟する。もし判断してその報道をひた隠しに隠すとする。しかし、いつかは、それが明らかになり大パニックに陥るのが関の山ではないか。

B 確かに、新聞社が知っている事実を故意に隠すことは、危険だね。でも、それは、知ってることは、すぐ報道しろであって、知らないことならいいということにはならない。その上で記者が無知ということは、暴力なんだ。具体的に洗剤パニックの点で、あれは暴力だと思う。

― そろそろ理想の新聞とは何ぞやといったところに話題をうつそう。

A ニューヨークタイムズに、「印刷に適する全てのニュース」という標語があるね。

B それだと、社のニュースに対する"判断"介入の余地がありそうだ。

D 「知り得た全べてのニュース」と言いかえたらどうか。やはり、すべて知りえたことを世論に伝えていくということが理想の新聞なんだろうね。

B すると今の一般紙は、この理想を追うことは不可能だろうね。企業の限界ということで集約できる。取材のしかたにも問題ある。

C いまの意見で機関紙同様、一般紙も理想の新聞には、なり得ないということがわかった。

A 完全な理想論かもしれないけど、すべてから、もちろん企業から独立した新聞でなくてはならないわけだ。人間というものに立脚するだけで、他のものからは、完全に独立しているもの。

D 資本主義の中では、理想の新聞ということは、企業化という問題、利潤を得なければならないという問題から有り得ないことになるね。

E 記者の立場として、マスを対置して考えてはいけない。マスの一員として考えなければ。そうなればさきほど論議した判断というものが入り込む余地はなくなる。

― 次に大学新聞とは何かという点を討議していこう。理想の新聞に対し、一般新聞は資本主義社会に存在するという問題を含んでいて、これはどうしょうもない点として明らかにされた。そこで企業というイメージから脱することのできるものとして、大学新聞を考えてほしい。

A 利潤を追求している新聞では、報道したことによって利潤が減少することは困る。しかし大学においてはこのようなことはない。それだからこそ知りうることはすべて報道できる。

C こうなると大学新聞は、理想の新聞になり得るのだろうか。一般紙が企業体自体だという限界があったと同様、大学新聞にも何かしらの限界があるのではないか。

E 大学新聞は理想の新聞に非常に近づくことができるだろう。

全員 (笑い)

ちょっと手前味噌かな。

E しかし大学新聞を組織している人間が大学生の一人であるという点に問題があるかも知れない。大学生の場合、クラブ活動だけをするわけにいかないからね。もし大学生が大学新聞を作ることによって、単位なり卒業証書なりがもらえるならば文句ないのに。

A ここにおもしろい例がある。アメリカのコロンビア大学に新聞学科があり、その学生は必ず大学新聞にたずさわらなければならず、それが単位になる。すなわち学生という立場と新聞にたずさわっている事とが一体化している。はじめから課外活動などという概念はないのだ。

D この例のような環境におかれるのなら、理想の新聞というものが求められるかも知れないな。

A それに加えて、大学という小さな空間は、取材も徹底するしね。

E しかし我々が今おかれている環境はめぐまれていない。

B 環境論はさておき、ここで考えなくてはならないのは、我々は今回大学祭の記事を取り扱ったが、フォード米大統領の来日の報道は全くしなかった。これはどういうことなのだろうか。

A 力量の問題で一般紙と同じに報道するのは無理だろうが、学習院の自治会がフォード来日阻止の運動を行っている、という面からは報道できたのではないかな。

B ある人からどうしてフォード来日の報道をしないのか。それは物事に差別を与えているのか、と質問された。

C それはやはりスタッフの人数、力量、その他の原因によってそれが制限されてはいるが、決して差別しているわけではない、と答えるしか方法がない。

A それに我々の新聞は『大学新聞』であるから、フォード来日と学習院大学との関係としかとらえられないのではないか。

D そうなると人間の立場に立つということに矛盾するのではないかな。フォード来日も大学祭も我々人間ー学生にとって重要なことだ。

A それでは田中退陣ということと、ビアフラのことを同次元で考えることができるかね。どうしても身近なものから考えるし、取材という面から考えても、自分の目・耳で直接取材できる方を記事にした方が、読者にも親切だ。その面を考えれば、大学新聞としては学内報道が重要にならざるを得ない。

「無指向性アンテナ」
急務は学内報道の充実

B それはわかるが、理念の中だけでも「人間として」ということは考えておきたいね。

E 重要なことは、取材することができるものはすべて取材し、その中から記事にしていくということかな。固定したアンテナでなく、移動できるアンテナとしての新聞が理想だろうね。

C もとにもどってしまうけれど、取材をするというとき、授業等といつもテンビンにかけてするわけだ。これは学生としてのジレンマかな。

B 学内における我々新聞社の役割りというのはどうなんだろう。

A 先ほど我々が考えたことを実行すればよいのでは。すなわち取材を徹底させ、これを紙面に載せ、読者に知らしめていく。もちろんあらゆるものからの偏見を脱してね。

D 新聞というのは、一般紙も大学新聞も関係なく、理念としては同一と考えてもいいのではないかな。

― ここまでのことを一応まとめておくと、大学新聞においては一般新聞にあった企業性という欠点は解消するものの、違った意味すなわち、学生が作るという限界ー欠点が出てきたわけだ。これは新聞を作るということにすべてをかけられない状態にあるということだね。まあこれは環境の不整備といってもいいだろう。これは、我々の運動によってある程度は、整備することができるだろう。たとえばさきほどのコロンビア大学のように新聞学科を設立する、といったようにね。しかし大学新聞の欠点は環境論だけではかたずけられないのではないか。そこにサークル論がでてくるように思えるのだがどうだろうか。

A われわれの年代(25)においては大学というものを、自分の人生航路のステップとしてとらえ、サークルのとらえ方も、大学生活の中では重要な点としていた。むしろサークル活動の合間に授業に出ていたといった具合いだった。それだけサークル活動を主体的にやったと自負している。

B われわれの年代(20)でも、サークル活動というものを中心に考えてきたようだ。サークル活動、すなわち新聞を作成することが、自分の生活と一体化していたのは確かだな。

D どういうわけかそれ以降の年代になるとそれが逆転する。授業によく出、もちろんこれが悪いわけではないが、その息抜き、余暇としてのサークル活動がある。

その授業に興味があるかといえばただ単に惰性というかなんというかわれわれには理解しがたいものによって出席するのだ。新聞を作っていくということが趣味化し、同人雑誌でも作っているかのようにサークル活動をおこなっているわけだ。もちろんすべてがそうだというわけではないがね。

C これは教育の弊害ではないかな。今の教育は型にはまった人間を多量に作り出して、物の見方考え方を画一化してしまって、創造意欲?を湧出させなくしているのだよ。多様な発想をされては、こまることが起ってしまうんだよ。

D ある一年生がいっていたのだけれども、彼らは、大学に入り無事四年間終えて、社会に出ればそれでよいといった平和ムードを好んでいるようだね。新聞社にあっても、自分の意見を表面に出すことなしに、趣味をいかして、新聞を作っていくといったような、趣味的な人間が多いのでは。

A 今の一年生の中の多くが、学生は授業に出るものだ、学生の本分は授業だとみているのは象徴的だな。

B 授業に出る出ないは、こちらから選択できるものなのだ。自分にとって本当に興味のあるものだけに出る。他の時間をサークル活動についやすといった具合にね。

B しかし一年生の多くは、選択さえせず、与えられたものを料理することなく、そのまま食べてしまうのだ。

C 与えられたものを喰う、これこそが現代教育の弊害なのだ。

A しかし楽観論かも知れないが、本当にそうかね。

E その楽観論を期待する立場でいうと、外部にはでてこないものの、個人個人の内部においては新しい価値感が生まれてきているのではないか。

A 新聞社においては、他のクラブにおいてよりは、新聞を作るという作業を行うことにより、まだ個人の主体性を確立するということができるのでは。

D そのことは他のクラブにおいても大なり小なりいえるがね。

B サークル論からすれば、ある程度のアマチャン的なところは許されるだろう。しかし、今まで話し合ってきた新聞論からみると新聞という社会的責任の重大性から、それは決して許されはしないだろう。もしある程度の個人的な自由を許すサークル論的発想から活動を行っていけば、読者層に対して申し訳けがたたない。

C 新聞の理想というものに集まっている我々としては、個人個人がそれに向って活動しなければならないだろう。その中で十分に人間的なふれあいも持てるようになる。

D そうなるとまず第一義的に新聞の理想を追求していく、そう [illegible] こと自体が、自分の生活となるということだろうね。

A 我々のクラブは新聞という特殊性ゆえに、個人の時間の中でクラブ活動を第一義的に考えなければならないな。

― そうだね。こんなところが結論と言えば、そう言えるだろうね。環境論は自らの手で改変し、サークル論と新聞論が、一体化するような活動をおこなっていくことによって、いくらかでも理想の新聞に近づくことができるだろうね。まあこれからも頑張って活動を行なっていこう。

資料

「意見広告」問題とは

意見広告なるものの存在が一般に認識されるようになったのは、ベ平連がニューヨーク・タイムズに載せた反戦広告いらいのことである。しかしこの広告は「見られた」ことによって有名化したのではなく、反戦広告をうつための募金募集の運動によって有名になった。これはベ平連のベトナム反戦運動の一戦術として「広告効果」があったのである。(掲載日 一九六五年十一月十六日)

次に意見広告が問題化したのは一九七三年十二月二日付のサンケイ新聞に掲載された自由民主党の意見広告がきっかけである。

この広告は、自由民主党が立案した「自由社会を守るキャンペーン」の第一回目で、同じ広告は日本経済新聞にものった。共産党は、その内容が自党の名誉を著しく傷つけたとして両新聞に抗議し、同時に同一スペース(全七段)の反論広告を無料で掲載するよう要求した。両社と共産党の間で数回の交渉がもたれ、日経は反論の掲載は断ったが、今後紛争のおそれのある政党間の意見広告の掲載は見合せると回答して、共産党との一応の諒解が成立した。

サンケイ側は(1)共産党が責任ある機関で決定した反論を委員長、書記局長らが公式の記者会見で発表するならニュース記事として編集方針に従って報道する。(2)意見広告の内容に関する責任は広告出稿者側(自民党)にあるので、共産党が直接、自民党の真意を確かめ、反論を求めていることを明らかにするなら無料で広告スペースを提供する(この場合料金は自民党からとりたてる)(3)共産党が意見広告を出稿するなら歓迎するし、その場合、料金については、弾力的な運用を考慮する、という回答を行った。

共産党は、この回答に満足せず、交渉をうちきり、十二月二十七日、サンケイ新聞、雑誌に対する取材拒否を通告し、七十四年二月八日、仮処分申請を東京地裁に提出した。

この仮処分申請は、五月十四日東京地方裁判所民事九部において申請却下を決定した。共産党はこの決定を不満とし、更に同年七月三一日、同じく東京地裁に対し、サンケイ新聞社を被告として、反論文掲載請求の本裁判を提起し、現在係争中である。

次の例ははばこういち、加東康一、石川弘義らの呼びかけにより45人が連名して行った「反自民意見広告」についてである。七月参議院選を前にして反自民キャンペーンを意図した人々が「意見広告」という形式によって、選挙民に訴えようと試みたものである。

朝日新聞社は掲載申し入れを次のような理由で拒絶した。

一、朝日新聞は個人並びに任意の団体による意見広告を掲載した前例がないこと。

二、申し入れ者の趣旨によればいかに表現をかえても、自民党誹謗になることが否定できないこと。

呼びかけ人であった前記三人はやむなく五月二十九日あらたに毎日新聞社に申し入れ六月十四日、正式回答をえた。

「一、「自民党には投票しない」「自民党を支持しない」は公選法一四六条に抵触する」「二、「革新系を支持する」ならば、掲載申込みに応ずる」

結局は「わたしたちは保革逆転を強く希望し革新系を支持します」におちついて、六月二四日夕刊二面の左下半五段の位置に掲載された。

アクセス権

近づく方法【権利】、読者、視聴者が、マスメディアに意見を、反映させる権利。TVでは、番組開放などの方法がある。欧米では発展中。(キャッチ44など)新聞では、方法が確立しておらずマスコミ論の中でも注目すべき問題になっている。

文化

御三家公演

大盛況ではあったものの…

そこに強固な〝プロ〟を見た！

日韓関係

日本語と韓国語

映像と音楽の美しい融合

惜しい人間ドラマとしての弱さ

—砂の器—

E. クラプトンの光と影

“音楽する”心を求めて

反体制レポート

あらゆる束縛からの解放を！

はじめに

部落大衆の現段階における階級的情況

支配階級の本質的な狙い

石川青年〝無期懲役〟判決を糾弾する

狭山闘争の戦闘的展開を！　田村健一

10月31日、東京高裁前一日比谷公園に結集した部落解放同盟労働者、学生、市民の強固な隊列

後には何が残ったか
大学祭を顧みて

十一月二日〜五日に行なわれた大学祭は、果してどんな意味をもったのだろう。「大学祭」シーズンも終わった今、キャンパスには冷たい北風が吹く。大学祭をめざしてつくられた展示物、立て看、それらをつくった学生の心には何が残っているだろう。満足感、解放感、はたまた空しさか。しらけきった冬空の下。そこには大学構内がある。その中には学生がいる。彼らは今——。

×　×　×

右の写真は十一月三日のピラ校である。一方、左の写真は十一月四日のピラ校である。現在の大学祭を象徴するものと言えよう。内容が違うとこうも観客の入りが違うものか。右は刑法改悪のシンポジウム、左は中年御三家の歌合戦である。今の自分の生活に直接かかわる問題はどちらか？ 皮肉にも中年御三家のショウを主催したのは、他ならぬわれわれ新聞社である。固い問題を考えるより、その場だけの楽しさへ走る。これは何もこの写真だけじゃない。大学祭に訪れる者たちの傾向がそうであるようだ。しかし、それではいつか後悔する。他人事じゃなくなる。

11月3日・12時ごろのピラ校内

11月4日・12時ごろのピラ校内

真の姿求めて七大学へ

学習院を初め、立教、早稲田、青山学院、明星、御茶ノ水女子、東京、の各大学の大学祭を見た。残念ながら、現在の大学祭はどれも駄目だという結論をもたざるを得ない。〝駄目な原因はこれだ〟と言えるものはない。しかし心あたるものもある。大学祭の真の姿を求めて模索し、行動した。その結果見つかった大学祭像は——。

何かをやった後、そこには必ず結果があり、反省がある。第五回大学祭を終えた学習院。実行委員に参加団体、ただの傍観者、全く大学へ来なかった学生、彼らも自分なりの反省を持ったであろう。

十一月はまさに大学祭の月であった。どの大学にも一見華やかさがあった。しかし、その裏にある大学生の姿は決してすばらしいものではなかった。数多くの大学祭を見て、また考えるべき問題も数多く……。

模擬店乱立が現状！
変革のカギー学生の心構え

模擬店あっての大学祭

今年の大学祭に共通に言えることは、模擬店の乱立である。「どう、おにいちゃん、食べていかない？」と呼び込みも激しい。一瞬新宿裏通りを思わせる。タコ焼、お好み焼、水アメ、綿アメ、フランクフルトに焼きソバ、その他いろいろ。値段も決して安くはない。でも、よく売れている。やってる大学生の顔が、またなんと生き生きしていることか。

いつも買う側にまわっている者が、一度売る側になってみたいと思うのか、昔の縁日の郷愁か、はたまた利潤追求なのか。「やってる方も楽しいし、見る方だって楽しいでしょう」焼き鳥屋の学生は言う。彼は楽しいかもしれんが、そういう状態を憂う学生（決して変人じゃない）もいることを忘れてほしくない。

客はさまざま

訪れる人たちは、やはり学生が多い。一人でというよりグループが多い。しかし、中年、老年層、子供たちも少なからず来ている。「こんな時でないと自由に大学へ入れませんからな」と中年過ぎの紳士風の人。この人にとって、大学祭は大学内見物の口実にすぎないようだ。でもこういう人はけっこう多い。子供たちにしても、模擬店に遊び場所もある。車の心配も全くなく楽しい限りであろう。

つまり、訪れる人間はそれぞれの思惑をもっている。そして自分なりに満足して帰っていく。そこには大学祭自体に疑問をもち、現状の変革を考える人などいまい。だが、大学生がそれでは困る。水アメ目当てに大学祭へ行く大学生考えただけでもガクンとくる。

11月1〜4日に行なれた立教祭

〝祭り〟本来の意義

東京大学のNSGF実行委員会アピールには「〝祭り〟とは、古来、その地域に根ざした伝統的な民族行事として行なわれてきて、宗教的色彩を持っていた。しかし種々の年中行事の様式は、農耕社会における生活慣習と密接な関係があり、村落共同体を中心として豊作の祈り、連帯感の強化を目的に自然発生的に起こってきて、宗教行事とはいえ、地域社会の構築親善、娯楽が主たる目的であった。こうした祭りでは、参加者の家柄身分等は関係なく、全員参加を建て前として、総出でその祭りを運営した。ところが、歴史を経るに従って、この祭りの本義は変容し、やがて一種のショウとされてしまうに至ったが、本来は人間同志の心の触れ合いの場であったことを決して忘れてはならない」と訴いている。大学祭も祭りにはちがいない。それも現在では、一種のショウ化した祭りの方に近い気がする。なぜなら、学外からの見物人がどっと押し掛けてくるから。

どちらが正面？ 二つの顔

今の大学祭は二つの顔をもっている。一つはシンポジウムや展示発表、もう一つはスナック、喫茶店、模擬店という顔である。大学祭という母体に二つの顔がくっついている。オバケじゃあるまいし顔は一つで十分だ。大学祭ならではの顔はどっちか、前者だという者、後者だという者、さまざまだろうが、前者の方を支持したい。年に一度の大学祭に参加する意義わざわざ授業をつぶして行なう意義を考えると、そこに在る〝重さ〟が違ってくる。

「さびしいですね。でも参加するとなると準備しやすく、グループ全員でできるもの。だから模擬店になるんでしょう。しかし、我々としては、その準備段階における交流と、参加することによって何かを得てくれればと思います。そうなるともう模擬店は模擬店だけじゃないですから」とNSGF実行委員は語る。

望まれる主体性

大学祭は、やはり大学生のものである。見に来る人が誰であろうと、そんなことは一切気にする必要はない。あくまでも学生が自分の手でつくってこそ意義がある。自分の大学の大学祭に訪れない学生がいていいはずがない。全員参加できるんだ。やりようによっては大学生活の結晶ともなり得る。

サークルが日ごろの研究成果を発表する。難しすぎて客は通り過ぎてゆく。でも興味ある人は質問し、説明者も勉強した知識をせいいっぱいことばにする。「僕らもわからないから勉強しました。こんなことがあることをより多くの人に知ってもらいたくて展示しています」と独占禁止法改正を扱っている部屋の学生は言う。わかってもらうにこしたことはないが、発表できるまでもってきた彼らの努力こそ至高のものである。演劇にしても、生け花にしても同じ日ごろの練習の積み重ねが大学祭で花開く。「何かをつかんでくれれば」と言った実行委員のことばの裏にあるものはこれではなかったのか。東大には利潤追求の模擬店はなかった。おろして売るだけの店もなかった。〝自分の手でつくって売る〟ことをたてまえとしたそうだ。

価値は〝当日〟のみならず

芸能人やタレントがくると見物人は増える。しかし、大学祭に彼らを呼ぶ時、呼んだことを自分のものとできるかどうかが問題だ。ちなみに、ピラ校で行なわれたかまやつひろしのショーでの彼のギャラは三十五万円だそうだ。「あの大学には誰々が来たぞ」なんて言って張りあって何になる。

大学生全部が大学祭を目標に生活しているわけではない、だから俺は参加しない。これが今の大学祭をつくった一要因である。誰でも自分の存在を示し、人に言いたいことがあるだろう。絶好の機会じゃないか大学祭は。一人が心細いなら同志を集め、参加を試みることが大切である。それでも「俺は家で寝てるよ」という学生がいたら、彼に一言いってやりたい。「君は〝老人〟か」と。大学祭を支持しないなら、「なぜ君は参加するんだ？」と文句を言いに大学へ来るべきだ。それだけの若さを持つべきだ。

学生にとって大学祭は〝当日〟だけのものであってはならない。大実委も六月の発足以来、夏の合宿を経て、討論を重ねて十一月へ臨む。発表者もそれぞれ、練習、討論、また練習、という段階を経て十一月へ臨む。その間、挫折あり、スランプあり、悩みあり。数々の困難をのりこえて〝当日〟を迎える。重要なのは段階だ。そこで相互の親睦が深まり、個人も成長する。大学祭は我々にそうした場を提供する。段階を踏み学生が学生の手でつくりあげた時、大学祭はきっと現在の姿を脱皮するだろう。

キャンパスの人

自由奔放！？に生きる

「チョット変わっててスゴークおもしろい人。」彼に初めて会った人は、たいていこんな風に言う。

彼に焦点をあてたのは、学習院にあって、まるで無名であるゆえに、かえって今日の学生気質が手にとるように見てとれるからである。

つかみどころのない人間だ。ウェイターと家庭教師のバイト、それに英会話。一週間のスケジュールがびっちり。

授業は「語学しか出てないよ。でも四時間のうち、一時間はもう落としたみたいだね。」と気楽に答える。たまに般教の教室で見かけても、お居寝中。

稼いだお金は「車と彼女のために使うね。」パーマのかかった髪の毛に手をやり、独特の口調。

学校に居ても退屈だし、遊ぶにはお金がかかるし、そこでバイト。バイトがいやになれば……。こんな生活、一度はやってみたい。でも、勇気がないのか、夢は夢。ところが彼はさしたる抵抗もなくそれを実現させた。これぞ自由奔放に生きられるなんて！

高二の時、「ハデな化粧して授業に出て」先生に色目を使ったら「こっち向くなっていわれたよ」。思いついたことは、たいていやっちゃう。「あいつを知らない先生は、たぶんいないヨ」。といわれるほどの有名人。

中学から学習院。「とにかくイイ学校だよ。好きさ。先生も生徒のことを一生懸命考えてくれるし。考え方は自由。イイ学校だよ」。もう仲間を笑わせる彼ではない。キリッとひきしまった表情もなかなか魅力的。

自由ってことが最高！それならどうしてバイトを、「考えるネー。でも自分を忙しくしてつまらないことでイジイジする時間をなくすため。また忙しいのが好きだからだな」あえて自分で自分に制約を与えてる。

人を笑わせるのが趣味。底抜けに愉快な奴だ。しかし、仲間から一歩離れると、あのユーモアが嘘のよう。どこか冷ややかな横顔を見る。

「一見〝遊んでる〟？でもその実、酒も賭け事もやらず。つきあってる女性も一人。自称「気の弱い男性」生きがい「彼女。ウソウソ。ウソじゃないけど、人を愛することかな」と赤ら顔案外と純情そう。

将来、外国へ行きたいと言う。得意の英会話も飛び出し笑い声が絶えない。でも、昔からの仲間に言わせると「あのユーモアは自分の弱さを隠すため」とか。しいて否定する人もない。

「束縛はイヤ、自由を愛する人間ですヨ。でも自由は孤独ダナー」タバコの火を消し、最後にポツンと淋しそうに語った。

確かにこれも彼の一面だ。（容）

（倉持薫さん・経済学科一年）

他大学拝見

大学はいっぱいある。大学生はもっといっぱいいる。でもその大学生たち、案外よその大学を知らない。しかし誰しも、他大学に若干の興味はあるだろう。外をながめて内のよさを知り、悪さも知る。そこから真の愛校心も生まれてくるものだ。そこで、今回は立教大学を訪れてみた。

×　×　×

学習院をはさんで、早稲田大学と立教大学がある。〝少々負けてるなあ〟という気がしないでもないが、あまりこだわらない。池袋駅西口から徒歩で十分立教通りをはさんで左右に校舎がある。ここの大学祭である立教祭は、こしゃくにも十一月一日〜四日。学習院とダブらせるとはいい度胸だ。展示物の内容、模擬店の値段はあまりかわらないが、人出とプログラムの値段（二五〇円）に関しては負けている。だが学内の広さと校舎のきれいさでは勝ってるといえる。そういえば、学習院はよくいわれる「教授一流、建物二流、学生は？流」

お隣りさん 立教さん

ところで立教通りには、学生相手の飲食店がいっぱいある。それも手ごろな値段。昼食時にはどれも満員になる。悲しいかな、学習院のまわりには、らしきものは一つもない。そう、立教は「学生街」をもっている。学食のメニューは学習院の比ではない。ああ、やっぱり負けてるなあ。帰る時、つたのからまる時計台が誇らしげに見送っている。でも、やっぱり、学習院大学が好きだ。（テツヤ）

立教近くの店の値段表

Campus Eye

長い間連載してきた「キャンパスNOW」は先月号で一応終了。また不死鳥のごとく紙面に登場することもありましょう。ご愛読に感謝致します。「キャンパスNOW」はかなりの人気を持っていました。しかし、新聞社は絶えず紙面の向上に努めております。それで、より読まれる、より親しまれる欄を目指して今回「キャンパスEYE」なるものを企画しました。文章をぐっと短くして〝言いたいことだけバッチリ言う〟ことに焦点を合わせました。従来の「キャンパスNOW」で捉えなかったものでも、今回からは大丈夫。毎日々々の大学生活で、ふと思ったり、感じたりしたこと、腹が立ったり、楽しくなったりしたこと、それがまさに「キャンパスEYE」です。誰でも持ってる目の玉でちょっと振り向けば、そこには〝何か〟があるでしょう。日々の生活から生まれたことを、パックンのタッチで綴る記者の腕前はともかく、大学内の隅々まで見つめる目を持ちたいですね。

×　×　×

蓊々会前のカップ・ヌードル販売機大はやり。いつでも、手がるに食える強み。男も女もあったもんじゃない。世はインスタント時代なり。もう二、三台ふえると学食はつぶれるぞ！

◇　◇

トイレの落書きも大学生となるとすごい。〝どうして落書きをするんですか〟という落書きもあった。トイレ内では安心して自己主張できるのかもしれん。しかし空しいのう。

◇　◇

冬は寒い—あたりまえだ。学生の本分は勉強だ—あたりまえだ。しかし、これはあくまでも、〝たてまえだ〟。

◇　◇

学食へ行くなら三人で行こう。一人が食券買うために並び、一人が椅子を確保し、もう一人がお茶を準備する。そうすりゃ、早く食べれるから。

最初に言っとくが、これは下宿人のひがみだからそのつもりで。学食へ来て、長い列に並んで、やっと坐って食べていた。隣りに坐るその人は、おいしそうなお弁当。こちとらカレーライスよ。

×　×　×

ピラ校の西。〝リカちゃん通り〟。日頃、怖そうな応援団のおにいさん。リカちゃん囲んで実に楽しそう。ただ〝院祭〟と書かれた文字が若干気になった。

◇　◇

校舎が校舎でなくなる大学祭。ピラ校に一千余名が入った。御三家をみるためかもしれんが、「これが授業中なら俺もうれしいんだが」〝ピラ校くん〟のささやきが聞こえそう。

◇　◇

諸物価値上り。模擬店はどれをみても高かった。〝物価高に挑戦して、何でも安く売るぞ〟という店が一軒でもあれば、ピリッとくるのに…。

◇　◇

町からミニスカートが消えた。キャンパスからも確かに消えた。流行かな？寒さのせいかな？モデル養成科でもできたのかな？

◇　◇

十一月の図書館。閲覧室に人まばら。いかにも図書館らしい風景。でも、その人たちの顔は真剣。〝遊ぶ〟のもいいけど、君はこの雰囲気にとけこめるか。

◇　◇

ポケットに手をつっこんで、肩をすぼめて歩くキャンパス。寒くなったもんだ。授業中に居眠りするとすぐ〝ハックション〟。

◇　◇

学年もいよいよ終盤。もうすぐ来年。今年俺は何かやったかな？

Information

★BIGBOX　ソウル&ニューステップダンスパーティー
12月19、20日、BIGBOX9階のビクターミュージックプラザにて。パーティー券一枚2000円。

★心の歌と若物達　野口英世記念館12月20日クリスマス定例フォークコンサート、5時より400円。

☆軽音楽同好会　千代田公会堂
12月16日　L・Mフェスティバル
5時より　450円
出演　ラ・ポーグ、ル・ジュネ等
ロックの好きな方、お誘い合せの上

☆スキー部　一般合宿
12月24日〜31日　長野県栂ケ岳
費用19,500円　バスで目的地へ。銀世界の中で、今年最後の一週間を楽しく過ごしてみませんか。

コーヒー 軽食 アドマン　新宿区下落合3-18-10 TEL（952）4950

やぶ重　天丼 親子丼　目白駅通り TEL（953）1809

music & tea room…… Chaconne　目白TEL（981）-5581

フルーツパーラー JURAKU　TEL 950-4981〜2

珈琲・工芸舎 こぱん　TOKYO.MEJIRO.TEL-952-4953

喫茶 目白茶房　下落合3-20-20 phone（950）8592

'75 25.Feb〜18.Mar（22日間）¥298,000
ヨーロッパ・ロマンの旅
締切せまる!!
旅程　東京➡ローマ➡フローレンス➡ミラノ➡チューリッヒ➡ハイデルベルグ➡ケルン➡アムステルダム➡ブラッセル➡パリ➡ロンドン➡東京
蓁々会・近畿日本ツーリスト
問い合せ・内線561　問い合せ（03）342-3746

《海外高校・短大・大学・大学院・編入入学相談》
国連加盟世界百十六ヶ国公費・私費留学方法教授
ユネスコ・国連・米国文部省等の資料使用
他 ロサンゼルス各種学校
英国オペア（3年間迄）
世田谷留学研究所（SISA）
〒155 東京都世田谷区代沢5-25-7 つつじ台マンション5号
TEL 03-414-2674㈹ 年中無休AM10:00〜PM10:00
（地方は電話相談可）